



Title	現代の高校生による「大和魂」の解釈について：『源氏物語』少女の巻の授業の一報告
Author(s)	菅原，利晃
Citation	国語論集，14
Issue Date	2017-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8247
Rights	

現代の高校生による「大和魂」の解釈について

『源氏物語』少女の巻の授業の一報告

菅原利晃

はじめに

『源氏物語』の少女の巻は、高等学校の教科書「古典」のごく一部のものに採られていたが、現行の教科書では採られていない。かつて採られていた箇所は、光源氏が息子である夕霧を、あえて大学に入れるという場面である（注1）。

少女の巻は、生徒にとって進路を考える上で身近な教材となる。光源氏の我が子夕霧への教育方針を読み取らせ、生徒自らの進路への意識を考えさせれば、より古典を身近に感じ取ることができ（注2）。

その中で、本文に「大和魂」という言葉が出てくるが、生徒の解釈は多種多様であった。しかし、「大和魂」を生徒それぞれが身近に感じ取り解釈することができた。本稿は、高等学校二年生の『源氏物語』少女の巻の授業の一報告であり、高校生が解釈した「大和魂」に関する小考である（注3）。

一

「大和魂」という言葉は、『源氏物語』少女の巻の教材本文では次の通りに用いられている。

なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるるかたも、強うはべらめ。さしあたりては、心もとなきやうにはべれども、つひの世のおもしとなるべき心おきてをならひなば、はべらずなりなむ後も、うしろやすかるべきによりなむ。

これは、光源氏が長男夕霧の祖母大宮に向かつて、十二歳で元服した夕霧を四位に奏請せずに、六位にとどめて大学（現代の大学とは異なるものである）に入れようとした理由を述べたものであり、そこに光源氏の教育方針が窺われる。

授業で用いたワークシートでは、『源氏物語』少女の巻の読解に際して、次のように5W1Hをもとに問いをもうけて、学習を

すすめさせた。

1 だが、だれに、だれの教育方針をいつ、どこで述べていますか。

2 光源氏の教育方針・理想の教育とはどのようなものですか。それを端的にあらわしている箇所を抜き出してみよう。

3 光源氏の考える教育について比較し、どのようなものか、なぜ必要なのか、考えよう。

① 光源氏自身の受けた教育

② 大学での教育

③ 大和魂について

4 あなたは、親と進路について、特に大学や進路について話し合ったことがありますか。また、どのような話をしましたか。特に、光源氏の教育方針・進路のあり方と、似ているところやちがうところはありますか。

5 自分の希望大学や進路実現に合わせて、『源氏物語』「少女の巻」と比較して、自分の考えをまとめてみよう。

特に、1〜3の問いは、5W1Hをもとにした問いであるが、当該文の内容をそれぞれの観点から要領よくとらえることができるようにしてある。ただ漠然と内容をとらえさせる問いではないので、生徒の本文理解を補助する点で有効な問いとなるように設定したものである。

次に、4〜5の問いは、古典を身近なものにすることを目的に、

夕霧と同じような立場に自分を置きかえて、生徒自身の進路を考えさせてみた。そこから、自分の進路考察にとってヒントとなるような点を、この授業を通して見出すことができ、それを自分の進路実現に向けて生かすことができれば、『源氏物語』という古典を読んだだけではなく、さらに一歩踏み進んで古典に親しんだことになり、古文学習の効果は大いにあると考える。

因みに、「大和魂」とは、『日本国語大辞典』（小学館、一九八一年一月）によれば、『ざえ（漢才）』に対して、日本人固有の知恵・才覚または思慮分別をいう。学問・知識に対する実務的な、あるいは実生活上の才知、能力」とある。

この話の用例は多くはないが、例えば、『今昔物語集』では唯一例として、巻第二十九「明法博士善澄、強盗に殺さるる語、第二十二」に「善澄、才は微妙かりけれども、露和魂無かりける者にて、此かる心幼き事を云ひて死ぬるなりとぞ」の一条がある（『今昔物語集 本朝世俗部四』新潮社、二〇一五年一月による）。こゝでの「和魂」とは、「漢学の学問的・文学的知識に対し、繊細の精神、日常の行届き心、事に処する冷静さと対応力などを意味する。」とある（同書頭注による）。

これについて、小林秀雄は、次のように述べている（注4）。

「今昔物語」に、「明法博士善澄、強盗ニ殺サレタルコト」という話がある（巻第二十九）。……これで見ると、「大和魂」という言葉の姿は、よほどはつきりして来る。やはり学問を意味する才に対して使われていて、机上の学問に比べられた

生活の知恵、死んだ理窟に対する、生きた常識という意味合である。……「やまと魂だによく堅固^{カタク}まりて、動くことなければ、昼夜からぶみのみよむといへども、かれに惑はさるゝうれひはなきなり、然れども世の人、とかく倭^{ヤマト}魂^{タマ}かたまりにくき物にて、から書をよめば、そのことよきにまどはされて、たぢろきやすきならひ也」……「姿」の経験は、「意」に抵抗する事も教えている筈である。「文辞の麗しさ」を味識する経験とは、言ってみれば、沈黙に堪える事を学ぶ知恵の事であり、これさえしっかり掴めば、「言のよさ」に「たぢろく」心配はない。宣長は、それを「やまと魂」が堅固^{カタク}まりさえすれば、と言う。「やまと魂」という言葉を、彼も「才^{ザイ}」に対して使っているのである。

そもそも、本居宣長は『うひ山ぶみ』において「道を学ばんと心ざすもがらは、第一に漢意儒意を、清く濯ぎ去て、やまと魂¹⁵をかたくする事を、要とすべし」と述べている(注5)。

また、『たまかつま』五の巻「業平、朝臣のいまは言の葉」において「心のまことにかへれかし、此朝臣は、一生のまこと、此歌にあらはれ、……やまとだましひなる人は、法師ながら、かくこそ有けれ、から心なる神道者歌学者、まさにかうはいはんや」とも述べている(注6)。これについて、石川淳は「歌における『実情』とは、このようなものであった。」と述べている(注7)。

つまり、漢学などを濯ぎ去りまことの心であることこそが「大和魂」であるというのである。宣長のいう「大和魂」は、『源氏

物語』や『今昔物語集』とはやや意味合いが異なるが、このまこと心から派生したものであり、それが「実情」にもなるのだというのである。

二

「大和魂」という言葉について、実際の授業での生徒の様子を述べる。

まず、ワークシートの3の③「大和魂について」の解答例として生徒の記入例を三名あげておく。なお、以下のA、B、C…は学習者を表す。

A 日常的な知恵や才覚、政治的または実務的な能力で、ゆくゆくは国の重鎮たる者として身につけるべき世才。

B この世で生きていくために必要な知恵や能力である。遊びほうけているといずれ頼り所のない人間になってしまうのでそうならないために必要である。

C 知識ではなく、知恵やその場の判断や考えを重んじるという考え。

これについては、口語訳や補助プリントを用いてまとめたりするなど、生徒それぞれの答えは異なったが、おおよそ、生徒全員が同じようなまとめをした。中には辞書を用いて調べたりする生徒もいたり、学習が進まない生徒もいたが、教師側から前述のようなアドバイスを与えたり、生徒同士で協力し合ったりして、な

んとか全員が仕上げる事ができた。

ワークシートをまとめる際に、机間指導したところ、「光源氏の時代にも大学ってあったんだなあ」とか、「大和魂って全然違う意味だったんだなあ」というような感想が特に多く聞かれた。

今までの教材部分とは違った視点で、意外な心持ちで、『源氏物語』を読むことができたようである。

三

次に、『源氏物語』少女の巻を読んだ上で、生徒個々の進路に
対する考えについてまとめさせた。これについて、ワークシート
の記述をもとに考察したい。

授業では、「5 自分の希望大学や進路実現に合わせて、『源氏物語』『少女の巻』と比較して、自分の考えをまとめてみよう。」
という問いをもうけた。

それについて、「①どんな職業につきたいか」、「②そのために
大学でどんなことを学びたいか」、「③大学を出た後に必要なこ
とは何か」という点について考えさせてみた。

『源氏物語』の場合は、①については「世のおもし」（国家の
重鎮、朝廷に仕える）、②については「才」（漢学など）、③につ
いては、「大和魂」（処世上の知恵や能力。政治的な才覚。）であ
る。これらについて、「自分の場合」はどうかを考えさせた。

以下のA、B、C…は学習者を表し、前掲の学習者と同じの者で
ある。

A ①…今のところ、あまり定まっていない。

②…いざやりたいことを見つけた時、なりたくてもなれな
い、ということがないように、できるだけ好成绩で、
選択肢を広げる。

③…広い視野をもつこと。幅広い知識を身につけること。

B ①…化学、生物系の職業。

②…英語、化学、生物学、それ以外でも数学などあらゆる
学問を学びたいです。

③…この世を生きていくために常識、能力、知恵が必要だ
と思います。

C ①…臨床医、研究医（人の病を治す職）

②…医学、人の体のしくみ

③…人とのコミュニケーションを上手く行う方法

D ①…いつかは必ず誰かが担わなくてはならない国家の運営
という大きな役目を、自分も担うことが可能なのであ
れば貢献したいと思う。

②…日本という国家の記録である日本史を究めてみたい。

また、高校ではあまり触れることのなかった世界史を
一から学び、見識を広げたい。

③…他者とのコミュニケーション能力と、人と人との均衡
を保つはたらきができるバランス感覚。

E ①…国際間で働く、もしくは、何かを教える

②…言語、思想、歴史、世界事情

③…誰とでも心を通じ合わせられる精神と言語能力

F ①…今のところ、医師

②…世の中の現象と心理に与える影響について（景気・季節・地域・生活リズムなどと心理について、とか）

③…今、医師になが求められているかを知ること

G ①…医者になりたい

②…生物学を学びたい

③…患者のことをしっかりと考えられるような人間になりたい

A は、①については「今のところ、あまり定まっていない。」

と述べているが、③の「大和魂」について、「広い視野をもつこと。幅広い知識を身につけること。」と述べている。このような進路未定の生徒も少なくなかったが、大学を出た後に必要なこととして、Aのように「広い視野をもつこと」や、単なる知識ではなく「幅広い知識を身につけること。」をあげる生徒は多かった。

やや具体性に欠ける記述ではあるが、これは、『源氏物語』少女御の巻の本文にあるキーワード「大和魂」に触発されて考え出したものと推察する。「大和魂」については、先のワークシート3の③で確認済みであり、古文の読解を通して、自己の意識を発見したものである。Bもまた、③の「大和魂」について、「この世

を生きていくために常識、能力、知恵が必要だと思います。」と述べているが、これもAと同様にキーワード「大和魂」に着目して現代の世の中のあり方から考え出したものであろう。古文の読解を通して、自己の意識を再発見し、認識を深めたものである。

C は、①については「臨床医、研究医（人の病を治す職）」を

あげ、③の「大和魂」については「人とのコミュニケーションを上手く行う方法」というように、医師として必要なことがらを言葉足らずながらも具体的にあげている。なお、Cのように、医師を志望する生徒がほかにも多く、「大和魂」について「コミュニケーション（能力）」をあげる生徒がことさら多かった。同じく

医師を志望するFも「今、医師になが求められているかを知ること」と述べているが、これも漠然としているが、Cと同様のものである。Gも「患者のことをしっかりと考えられるような人間になりたい」と述べている。高校生による医師にとっての「大和魂」とは、現代に置き換えれば、患者との「コミュニケーション」が

大切だというのである。また、医師志望者以外でも「大和魂」について、「コミュニケーション（能力）」や対人関係の大切さ、人を信頼すること、人と仲良く協力すること、などを書いた生徒がたいへん多かった。D「他者とのコミュニケーション能力と、人と人との均衡を保つはたらきができるバランス感覚」、E「誰とでも心を通じ合わせられる精神と言語能力」、G「患者のことをしっかりと考えられるような人間になりたい」とある通りである。震災後、一時期「絆」という語が広まったが、世の中がこのような人としてのあり方を求めているために、生徒にもそのような考えが浸透しているものであると推察する。また、昨今の医学部をはじめとする大学入試におけるアドミッションポリシーについて、生徒が進路学習としてそれぞれに調べていることも大いに影響があると思われる

る。「医者＝コミュニケーション」という単純な言葉の連想だけで終わってしまったてはいけませんが、生徒は今回の授業を通して、特に「大和魂」という古語と結びつけて、自己の進路意識のきっかけを見出し再認識できたものと思われる。

Dは、①として「いつかは必ず誰かが担わなくてはならない国家の運営という大きな役目を、自分も担うことが可能なのであれば貢献したいと思う。」と述べている。具体的な職業は書いていないが、「国家の運営という大きな役目」というのは、おそらく『源氏物語』本文や授業の理解を通して考え出したものであろう。

「日本史を究め」、「世界史を一から学び、見識を広げたい。」と述べているが、学問を究め見識を広げることは『源氏物語』の場合と同様の考えである。

Eは、①として「国際間で働く、もしくは、何かを教える」と述べている。実は、Eは機関指導の過程で対話したところ、国連などの国際機関で働きたいことを言っていた生徒である。そのため、③では「誰でも心を通じ合わせられる精神と言語能力」というように、「コミュニケーション」はもとより、「言語能力」をあげていたのである。これも、単純に外国語を巧みに操ることができるということだけではなく、「国際間で働く」ため、そして「誰でも心を通じ合わせられる」ために必要な「言語能力」を指しているのであろう。ワークシートでは読み取れない生徒の進路意識の深さは、機関指導などの対話を通してなしうるものである。

Fは、①として「医師」をあげ、②として「世の中の現象と心

理に与える影響について（景気・季節・地域・生活リズムなどと心理について、とか）と述べている。「医師」として大学で学ぶこととしてはやや違和感があるが、これも、機関指導によってわかったことだが、Fは実は精神科医を目指しているのだという。そのため「心理に与える影響について」と特記しているのである。「大和魂」に関する、高校生各自の具体的な解釈は以上である。なお、二クラス全生徒八八名の各自の考える「大和魂」については次の通りである。キーワードのみをあげてみる（分類は筆者による。複数解答を含む。なお記述のない者は五名である）。

○ 社会や人との関わりに関するもの

コミュニケーション能力9 人づきあい、人との関わり、誰でも心を通じ合わせられる精神8 社会常識7 人としてのモラル、道徳5 処世術、社会で生きぬくすべ3 人脈3 信頼されること3 思いやり2 人とうまくやっていくための社会性 困っている人に区別なく手を差し伸べること 他人への感謝の心 うまくたちまわる能力 空気を読むこと 円滑な人間関係を構築すること

○ 自己に関するもの

瞬発的な判断力、状況判断する力、決断力、知識に基づいた理性的な判断をする能力、臨機応変に対応する力8 創造力、ひらめき、センス、表現力7 向上心、常に学ぶこと6 広い視野6 実際に伴う行動力5 体力3 経験、実践力3 実際の業務における力や慣れや技術、言語能力3 目標をも

って行動すること 3 気力、気合い 3 忍耐力、粘り強い姿勢 3 ハングリー精神 自活（自炊）すること 好奇心 人生を楽しむ心 専門的なことについての修業 ある意味での妥協しない心 医者としての自覚 責任感

「体力」「気力、気合い」など、『源氏物語』の「大和魂」とはややかけ離れたものも見られるが、先の A「日常的な知恵や才覚」、B「この世で生きていくために必要な知恵や能力」、C「知恵やその場の判断や考え」としては、現代の高校生それぞれの将来の職業に見合ったものであるとは言えよう。

おわりに

以上が、『源氏物語』少女の巻の授業 特に「大和魂」に関する報告の一部である。

生徒は、『源氏物語』少女の巻における光源氏と夕霧との関係について、それと自分の進路・親子関係について考えることができた。古典の世界と自分の進路との比較を通して、生徒は読みの深化がはかられ、自己分析・自省の段階へとつなげることができたのである。

つまり、古典を自分の身に沿うような形で読むことが、生徒の読みの深化につながり、古典に親しむことへ向かうものでもある。

最後に、「光源氏の教育方針について、自分の考えや感想をまとめよう。」について、特に「大和魂」に関する生徒の意見をあげてみる。

A ただ勉強すればよいということではなく、「大和魂」が必要である。「大和魂」という言葉の内容について再認識できた。

B 源氏の教育方針はよいと思う。苦勞して身に付けた知識は一生役立つし、教養を備えかつ知恵や能力のある人は必ず成功できる。自らの経験から子どもにもするように学ばせるのはすばらしい。

C 光源氏の教育方針にもある「大和魂」は5で書いた「人とのコミュニケーション力」に似ていると思う、自分にも必要なものだと思う、共感できた。

D 安易に出世させるのではなく、処世上の知恵や能力をつけさせることによって、中身が伴って、高い位につくことができるという点で、光源氏の教育方針には賛同できる。

G たしかに世の中の重鎮になるためには位だけではなくそれに伴う「才」、「大和魂」が必要だと思う。自分もこの授業を通して将来のために本当に何が必要であるのかを考えさせられた。

「大和魂」について、A「ただ勉強すればよいということではなく」、B「教養を備えかつ知恵や能力のある人」になるべきだという意見が多く見られた。D「処世上の知恵や能力をつけさせることによって、中身が伴う」のであり、G「位だけではなくそれに伴う「才」、「大和魂」が必要」なのである。学問（漢学）

も必要だが、それに伴った「大和魂」もまた必要だということである。

現代に置き換えれば、Cは「大和魂」について「人とのコミュニケーション力」に似ている」と述べているが、このように現代とのつながりを感じている生徒も見られた。

今回の授業を通して、生徒の進路意識の発掘、向上、変化が見られたことは大いに効果的であったといえる。

古典の世界の自分と同じような体験・思いから、今に生きる自分を見つめ直すことは、古典に近づき親しむということにほかならない。

さらに、生徒の主體的な読みに従った古典の文章の有効な教材開発と、授業方法について考えたい。

注

(1) 『源氏物語』少女の巻は、高等学校の教科書「古典」のごく一部のものに採られていたが(第一学習社「古典」など)、現行の教科書では採られていない。

(2) 拙稿「生徒の進路意識を喚起させ古典に親しませる授業―『源氏物語』少女の巻を読み自分の進路について考えよう―」(『月刊国語教育研究(日本国語教育学会)』第五一六号、二〇一五年四月)。

(3) 授業で用いた教材は、明治書院『読解力錬成古文の徹底問題』による。

(4) 小林秀雄『本居宣長』(新潮社、一九七七年十月・新潮

文庫、一九九二年五月)による。なお、「やまと魂だに：ならひ也」の本文は「うひ山ぶみ」によるものである。

(5) 『本居宣長 日本思想大系四〇』(岩波書店、一九七八年一月)による。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 『本居宣長 日本の名著二』(中央公論社、一九八四年三月)による。

※ 本稿では、引用に際して、仮名遣いはそのままとし、漢字の旧字体は適宜新字体にあらため、ふりがなや傍線等は適宜省略した。

※ 本稿は、釧路国語教育学会(平成二十七年九月二十六日、於北海道教育大学釧路校)での研究発表をもとに作成したものである。

※ 本研究は、JSPS科研費15H00117(『源氏物語玉の小櫛』を教材として古典に近づけ親しませる授業の研究)の助成を受けています。

(すがわらとしあき/北嶺中・高等学校)